

秋天瑠璃の一日、真鶴町にある中川一政美術館を訪れた。

私は真鶴という地が好きなので、近くの小田原に住んでいるのを幸いにときたま訪れる。しかし美術館に来るのは三度目である。

真鶴は漁港を抱え、魚付林としての原生林に覆われた岬の町である。平家の追手から源頼朝が身を隠したといわれるササノエ嶋窟が漁港の近くにあり、江戸城の築城に使われた石を産する古くからの石切場もある。港では毎年夏に、日本の三大舟祭りの一つと言われる貴船神社の格調高く趣深い舟祭りが行われる。

岬の突端には、与謝野晶子の歌碑がある。

「わが立てる真鶴崎が二つにす相模の海と伊豆の自波」

男性的な力強い歌だ。

志賀直哉は有名な短編『真鶴』を、夏目漱石は『真鶴行』を書いているという。

このように歴史的にも由緒のある町であり、古来多くの文人に愛された地である。その地に、平成元年二月に中川一政美術館が建てられ、開館の運びとなった。中川一政が長年真鶴町に住んでいたからである。

県立真鶴半島自然公園の中の、お林展望公園に隣接する崖地に在る、周囲の深い緑に調和した白と青の滯洒なフツフツ三階建ての美術館だ。

中川の作品二百八十点という大量の寄贈をもとに、町が約四億五千万円をかけて実現したものである。中川一政美術館は彼の母方の里に当たる石川県松任市にも、市立中川一政美術館がありこれで二館めだとのことである。

全部で茶室を含む六つの小規模の展示場があり、そこには鯉や金魚などを描いた岩彩作品や、名作『薔薇』や『向日葵』、『駒ヶ岳』を並べた油彩作品がある。さらに余技とはとても思えない、絵画的とても表現すべき味わい深い「書」が飾ってある。彼の多能ぶりを示す茶室があり、交友関係の広さを語るように高村光太郎や岸田劉生や武者小路実篤の作品が展示してある。中川は歌会始の召人をつとめるほどの歌の名手でもある。

ここで、画伯がこよなく愛した薔薇や向日葵の絵とともに、福浦や駒ヶ岳をテーマにした作品を思っ存分鑑賞できる。特に私は百号の『駒ヶ岳』の前では力強い筆致に圧倒

された。福浦も駒ヶ岳も私がよく知っている風景であり、いつそう親しみを覚えた。が、やはり中川一政は薔薇と向日葵の画家なのかという気がする。ゴッホと同じように彼の絵画にも根底から揺さぶられるような感じがある。観る人の心に激しく深く迫るのだ。でも総合的に見ると、中川の芸術を形造っているのは東洋的文人精神なのではないだろうか。

建物が何より外の自然とよくなじんでおり、芸術の棲む館という気配がする。真鶴の自然を本当に大事にしたい。この真鶴が一時リゾートマンションの進出で、環境破壊を招くおそれがあったが、町長や住民の反対で防ぐことができたのはなによりだった。

外に出ると中秋の空の抜けるような青さが目にしみた。

岬の高台から眺める風景は私にはなじみのものである。右手に伊豆半島が彫刻的な起伏を描いて海になだれこんでおり、眼前には初島がのどかに豆粒のように浮かんでいる。水平線の、雲が^{あじさい}襲撃と棚引く辺りには伊豆大島が微かに望見できる。海の群青の美しさは、人の気持ちを一時的にまで昂揚させる。

真鶴の風物を楽しんだ秋高气爽の一日であった。